

# 6

月にふたたび、台湾を訪れた。3月は建築系ラジオのツアーだったが、今回は国立台湾美術館の招待により、「展覧×創作―台日建築交流」のシンポジウムに石上純也とともに出席するためである。

その前日、台北にて国立博物館を見学した。感心したのは、建築関係の資料を収集するプロジェクトに着手しており、1960年代前後の台湾建築の展覧会を開催していたこと。本連載でも触れたように、マニラの国立博物館も常設の建築史の展示室をもつが、残念ながら日本のナショナル・ミュージアムにはそれが無い。なるほど、日本の現代建築は世界的に高く評価されており、だからこそ筆者と石上はヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展2008の報告をかねて、台湾と呼ばれた。

しかし、お台場のアニメ・ミュージアムが話題になっても、建築博物館の構想は一向に聞こえてこない。日本の現代建築に

関する貴重な資料を収集する国内の機関はなく、ポンピドゥセンターなどに購入され、海外に流出している。そうした状況に一石を投じたのが、今年の夏、東京の6つの現代美術ギャラリーが連動した『ARCHITECT/TOKYO/2009』の企画だった。

さて、台中の国立台湾美術館では、前夜祭として中庭の大階段を座席に用いて、ペチャクチャナイトが開催された。これはもともと日本に拠点を置くクライン・ダイサム・アーキテクトが発案したイベントで、いまや世界各地に広がっている。もっとも、六本木のsuper deluxeでは通常、筆者が仙台にいる水曜日の夜に行なうために、何度か打診はあったのだが、一度も参加したことがなかった。だから、台湾で初体験である。

ペチャクチャナイトは、プレゼンテーションのシステムが興味深い。20枚のスライドを20秒間隔で自動的に流しながらしゃべるといふシンプルルールだ

けである。とかく長くなりがちなたークを400秒で手際よく終えるのが醍醐味だ。日本からは筆者と石上、そして台湾からは中堅から若手まで、活躍中の10人の建築家、曾璋（紅色空間）、劉國滄（打開聯合設計工作室）、黃謙智（小智研發）、莫仁傑（SURV 都市策略）、黃明威、陸希傑（CJ Studio）、龔書章（原相建築聯合事務所）、黃聲遠、邱文傑（大瀚學乙設計工程有限公司）、楊家凱（台灣餘弦建築事務所）が参加し、最新の台湾の建築事情もよくわかった。ペチャクチャナイトは、大いに盛り上がり、美術館の屋外を効果的に使うのにもすぐれたイベントだった。

## ペチャクチャナイト初体験

@Tai-tiong



国立台湾美術館（台中）で開催されたペチャクチャナイトに詰めかけた聴衆。中庭の大階段が座席代わり 写真提供：筆者

をちこち散歩

### 五十嵐太郎

いがらしたろう  
建築史家  
東北大学教授